
❖ REC Community College ❖

龍谷大学世界仏教文化研究センター提携講座

<前期>

「聖地をめぐる一聖なる場所とその記憶一」

2017 年 5 月 10 日(水)、17 日(水)、24 日(水)、5 月 31 日(水)、6 月 7 日(水)

15:00～16:30 龍谷大学深草学舎 紫光館



講座の様子
(龍谷大学深草学舎 紫光館)

❖ 概 要 ❖

❖ 講義の概要 ❖

2017年5月10日から6月7日にかけて、龍谷大学世界仏教文化研究センター提携講座「聖地をめぐる一聖なる場所とその記憶―」が、龍谷大学深草学舎紫光館で開催された(受講生:22名)。

仏教にまつわる聖地は日本に多く存在するが、このような聖地は、一体どのようなプロセスで創出されたのか。本講座では、聖地をめぐる人々の営為を通じて、人間存在の根本的な在り方を探求した。

講座は、全5回の講義から構成され、第1回の講義を唐澤太輔(本センター博士研究員)、第2回講義を大澤絢子(本センターリサーチ・アシスタント)、第3回講義を金澤豊(本センター博士研究員)、第4回を李曼寧(本センターリサーチ・アシスタント)、第5回を亀山隆彦(本センターリサーチ・アシスタント)が担当した。各講義の内容は、以下に述べる通りである。

第1回:「聖地における夢告知」

講 師:唐澤太輔(龍谷大学世界仏教文化研究センター博士研究員)

聖地には「夢」や「幻視」といったヴィジョンが深く関わっている。本講義では、まず仏教者が見た「夢」及び「夢告」について紹介をした(泰澄大師・明恵上人・一遍上人など)。次に「聖地」を、人間の手によって作られた聖なる場所と自然界に存在する聖空間に分けて、それぞれの特徴を解説した。そして、生と死の交差点、この世とあの世の接点でもある聖地熊野について、哲学的な考察へと話をつなげていった。古来、熊野は異界への「通路」とされてきた。この中間機構としての「通路」がもつ重要性について、思想家・人類学者の中沢新一の言葉を借りつつ解説した。

最後に、文覚上人や南方熊楠が那智山で経験した「生」と「死」の経験について紹介し、聖地が我々にもたらす意味について述べた。我々は、聖地へ向かう。そこで我々は、自己と他者、現実世界と根源的な場との関係について深く考える機会が与えられるのである。

第2回:「聖地にまつわる祖師像」

講 師:大澤絢子(龍谷大学世界仏教文化研究センターリサーチ・アシスタント)

聖地とは、神聖という概念と空間や時間とが結びついて成った特定の場所をさす。祖師とは、一宗一派を開いた人物、あるいはその教えの系統を伝えた人などさすが、本講座では、聖地にまつわる祖師のイメージの形成の過程について、主に浄土真宗の宗祖親鸞を中心に検証し、聖地と祖師像との関係性を考察した。

ある地が特にそれが祖師への信仰と結びつくとき、巡礼の対象となる聖地は祖師の生涯における何らかの事実（あるいは縁起、物語）と共に語られる。聖地を語る縁起、祖師を語る伝記においては、そのはじまりが何らかの宗教的儀礼や実践である場合が多く、そのなかでは、日常の空間では考えられないようなものが起こり、祖師の特別さを強調する役割を担っている。

親鸞自身は自らの生涯についてほとんど言及しておらず、史実としては不明なことが多いが、事実を彩る物語（実像と虚像）から聖地と親鸞をめぐる物語が形成されていく。特に門信徒は宗祖の遺跡を巡ることで、祖師への信仰をさらに高め、それにしたがってまた新たな物語も形成されていった。

祖師に関わる聖地は、その場所を訪れ、想像する過程でさらに祖師のイメージは固まっていく。一方、聖地とは信仰のみならず経済や交通手段の発達など様々な要因が相俟って成立するものであり、聖地の変容と共に祖師像も多様なものになっていくことを解説した。

第3回：「悼みの場としての聖地」

講 師：金澤豊（龍谷大学世界仏教文化研究センター博士研究員）

訪れるに値する特別な場所として表象化された「聖地」の範疇には、悼みの場が含まれるのではないか。この仮説について先行研究を概観し、講師の経験を交えながら実証した。

悼みの場に赴くことは、2000年以降「ダークツーリズム」として定義され、盛り上がりを見せているトピックであると紹介し、それは単なる物見遊山ではなく、場に身を置いた者の意識や生き方が変わる効果がある事を述べた。

講師が沖縄やビルマに赴いた経験から、現地の写真を投影し「当事者とは誰なのか」という問い直しが起こったことを話した。そこから如何なる痛みを感じ、その感じたことを考え続けることが聖地を訪れる事の効用であるとまとめた。

改めて、何のために「聖地」があるのかを考えると、世界遺産のような場を客観視するだけの聖地論では不十分であり、聖地論に「ダークツーリズム」という補助線を引くことによって、悼み、自らの存在を深めることができるのではないかと受講生に訴えた。講義の最後に、実例として、鴨長明の『発心集』巻4第1話に見える数種類の聖地——熊野三山という普遍的に認識された仏教聖地、登場人物の隠居僧が転々した後ようやく定住するようになった『法華経』の力によっての、彼に最適の修行聖地、80数年も世間にバレな

かったが、命が危ない義叡の至心祈願に応じて一度だけ開放された聖地——を紹介した。

第4回：「帰途のない聖地へー補陀落へ向かう人々ー」

講 師：李曼寧（龍谷大学世界仏教文化研究センターリサーチ・アシスタント）

「聖地参り」は、日本だけではなく、世界中の宗教信仰者の間に盛んに行われた信仰行為の一つであり、古代から近現代まで盛んに行われてきた。そして、そのなかに、千年以上続けられていたが現在は途絶えた、日本特有の「聖地参り」行為があった。それは「補陀落渡海」と通称され、観音菩薩が住む補陀落山に目指して、船で海に出る作法であった。

一般的な巡礼式の聖地参りとは異なり、補陀落渡海はそのまま浄土に入ることを目指している「帰途のない旅」である。一方、海に出ることは命が落ちる危険性が極めて高いので、現代的な見方からは「自殺行為」とも考えられ、古代においてもよく「捨身行」、特にそのなかの「入水行」の一種であると考えられていた。しかし、「捨身行」「入水行」および「補陀落渡海」の歴史を遡ってみると、その本質上の違いがわかる。

一般的な「捨身行」は、『法華経』『薬王菩薩本地品』や「捨身飼虎」等の釈尊前世譚などを根拠とし、「仏供養」（焼身）または「衆生布施」（投身、入水）を目的とする。しかし、補陀落に目指して海に船出した人々は同じく身命を惜しまぬ一面を持っている一方、その行為の根本思想に立つのは、観音浄土は現世にあることを堅く信じていることであった。この堅固な道心の下で、補陀落を目指した人々は、この「帰途のない旅」に踏み切ったのである。

第5回：「絵解きと参詣曼陀羅」

講 師：亀山隆彦（龍谷大学世界仏教文化研究センターリサーチ・アシスタント）

本講義では「参詣曼荼羅」を題材にとり、歴史の中で徐々に発展し、複層化していく聖地のありようについて議論した。参詣曼荼羅とは、16世紀から17世紀にかけて、寺院、神社、霊山等への人々の参詣をうながすために製作された宗教的案内図である。

最新の宗教社会学の成果に基づくなら、いわゆる聖地とそれ以外の世俗の場所は、場所そのものと緊密に結びついた聖なる出来事の「記憶」、しばしば「物語」の形で付与される聖なる時間の記憶によって、社会的に明瞭に区別される。すなわち後に聖地と呼称される場所に、社会より先ず物語が与えられ、次に、与えられた物語の要請にしたがって、そこが聖なる場であることを指し示す「マーカー」が設定される。これら記憶・物語・マーカーの三つがそろってはじめて、社会的存在としての聖地は存立しうる。

今回の講義では、時間が経過する中で、このような聖地の記憶・物語が重層化し、合わせてマーカーも複数化していくこと、つまり聖地の時間的なダイナミズムを、参詣曼荼羅

の一つである「立山曼荼羅」の分析を通じて考察した。

❖ ま と め ❖

本講座は、2016年前期に開催した「聖地をめぐって―説話・密教・夢―」の後継講座である。その際の講座内容を一新し、新たな知見から講座を行った。担当した5名の講師は、2017年度4月から始動した仏教文化研究所研究プロジェクト「仏教と聖地に関する総合的研究―聖なる表象とは何か―」（代表：楠淳澄教授）にも所属しており、本講座は、今後のプロジェクト展開の第一歩にもなった。

毎回、講義内容や講義の様子を担当講師が他の講師へメールなどで報告し合うことで、それぞれ専門分野の異なる5名が、コンセンサスを取りながらうまく講義を進めることができた。全5回を通じて、受講生は毎回非常に熱心に講義を聴講していた。事前に綿密な準備を行い、また詳細なレジュメやパワーポイントなどを用いて講義を行い、各回、大変密度の濃い時間を受講生に提供することができた。

【文責】 龍谷大学世界仏教文化研究センター博士研究員、リサーチ・アシスタント一同